

営農情報（水稻）

令和5年4月発行

福岡大城農業協同組合
南筑後普及指導センター
久留米普及指導センター

5月下旬頃から令和5年産米の育苗作業が始まります。“苗半作”と昔から言われるように、良質米の安定生産のためには健苗の育成が重要です。

～ポイント～

- ◎田植予定日から逆算して、種子の浸漬日や播種日を決めます。
- ◎高温障害を避けるため、田植は6月20日以降に行います。

1 種子消毒

(1)種籾10kg当たり下記農薬の混合薬液20ℓを用い、24時間浸漬します。

薬剤名	使用濃度（種籾10kg当たり使用量）
テクリードCフロアブル	200倍（100ml）
スミチオン乳剤	1000倍（20ml）

※いもち病対策を強化する場合は、ベンレート水和剤1000倍（種籾10kg当たり20g）も混合します。

(2)浸漬中は薬液を2～3回かき混ぜ、全体に薬液がまわるようにします。

浸漬後は水洗いせず、そのまま催芽します。

(3)種子消毒に使用した薬液は、絶対に河川・クリーク等に流さないでください。

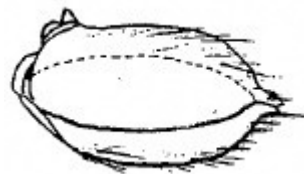
2 浸種及び催芽

(1)種子消毒後、水に4日程度浸種します。

(2)催芽（芽出し）の程度は、鳩胸程度～1mm位が適当です。また、種籾が酸素不足にならないように、**浸種中の水は毎日交換する**とともに、種子の芽出しをそろえるため**上下を入れ替えます**。

(3)温度が上がると、発芽ムラや病害の原因となるため、直射日光を避けた場所で浸種を行ってください。

この程度まで催芽させる（鳩胸程度）→



3 播種及び出芽

- (1) 1箱当たり催芽粉1合3勺(約150g)程度となるよう播種量を調整します。育苗日数が長くなる場合は、播種量を減らして老化を防ぎます。
- (2) 播種時にかん水を兼ねて、苗箱20箱に対し水10ℓ当たりタチガレエースM液剤20ml(500倍)を混ぜて、かん注します。
- (3) 健苗育成及び育苗中の病害発生予防のため、**平床出芽を基本**として下さい。

平床出芽

積み重ねより1～2日出芽が遅れますが、高温やカビ等の育苗障害が出にくく、健苗が育成できます。

- ① まとまった雨が降っても、冠水しないような育苗場所を選定します。
- ② 苗箱を並べる用地を水平にします。
- ③ 田畑に並べる場合、ビニールを敷き、根が地面に下りるのを防ぎます。
- ④ 厚さ1～3cmの台木またはパイプをわたすことで、苗箱を水平に保ち、水分の偏りをなくします。高低差があると、高い部分は乾燥しやすくなり、出芽や生育が不良となります。
- ⑤ 播種時に水をたっぷりかけておきます。
- ⑥ 苗箱を並べます。
- ⑦ 寒冷紗を二重に被せ、5～7日(苗長3～4cm)で一重にし、その後2～3日(苗長4～5cm)になったら完全に外します。

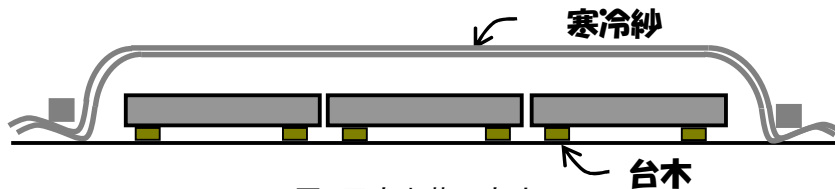


図 平床出芽の方法

- (4) 水管理は、被覆期間中は1日1回朝のかん水を基本とし、しっかりかん水します。回数を多くしすぎると、根張りが弱くなる場合があります。育苗期間の前半は1日1～2回、後半は1日2～3回かん水します。天候や床土の種類によっては乾きやすいため、土の乾き具合を良く確認し、かん水回数を調節します。

注意

「元気つくし」・「ツクシホマレ」は苗が伸びやすいので、「ヒノヒカリ」よりも1～2日早めに寒冷紗を除去するよう心がけて下さい。

4 田植え

トビイロウンカの被害や登熟期間の高温遭遇による品質低下を防ぐため、早植えは行わず、6月20日以降に適期植えを行います。また、極端な疎植は、紋枯病のリスクが高くなり、充実不足により、収量・品質が低下しやすくなるため、避けます。

<栽植目安>
坪当たり50～60株、1株当たり3～4本

5 病害虫防除

「元気つくし」はいもち病耐性が「弱」のため、アンコール箱粒剤を使用します。

品種	箱粒剤	対象病害虫	使用時期
「元気つくし」	アンコール箱粒剤	いもち病・ ウンカ類・コブノメガ	移植3日前～移植当日
「ヒノヒカリ」 「ツクシホマレ」	フェルテラゼカロン箱粒剤	ウンカ類・コブノメガ	播種時(覆土前) ～移植当日

<留意点>

- ・効果の安定のため田植え前日までに散布します。
- ・散布後は薬剤定着のため軽くジョロでかん水します。
- ・確実に50g/箱を施用します。(薬量が少ないと効果が不十分)

6 雑草防除(初中期一発除草剤)

初中期一発除草剤は、水を介して広がり、有効成分が土壌表面に落ち着き、土壌表層に草を枯らすための「処理層」を作ります。雑草の種から出た芽や根が「処理層」に触れたときに成分を吸収し、枯死します。

<注意点>

- ・田植えから除草剤散布まで日があくと雑草の生育も進むため、農薬の使用基準内でなるべく早く処理します。
- ・粒剤の田植え同時処理を行う場合は、移植後速やかに入水します。
(土の戻りが悪いところでは薬害が出やすいため、使用を避けます)
- ・除草剤が均一に拡散するよう、処理前に水を充分入れましょう。
(粒剤・フロアブル：水深3～5cm、ジャンボ剤・FG剤：水深5～6cm)
- ・除草剤成分の河川への流亡を防ぐため、散布後7日間は落水できません。
(漏水に注意)

7 麦わらすき込み田の管理のポイント

● 深めに耕起する

- ・ 麦わらが短いと浮き上がりやすいため、やや長め（20cm程度）に切断します。
- ・ やや深めに耕して麦わらを土中へ埋没させます。

● 代かきの水は最小限度で（漉かき）

- ・ 尾輪の跡に水がたまる程度のごく浅水で、荒代かきを行います。
- ・ 麦わらの浮き上がり防止のため、代かきのときはロータリの回転は遅くします。



やや長め（20cm程度）に切断



尾輪の跡に水が
たまる程度

● 基肥を増肥（10aあたり窒素成分で2kg）

- ・ 前年水稻を作付けしたほ場は、麦わらをすき込むと、稲の初期生育が劣るため、基肥を窒素成分2kg（ちくごのめぐみは10kg、基肥一発肥料は5kg程度）/10a分増肥します。
- ・ 前年大豆を作付けしたほ場は、初期生育が旺盛になるため、増肥の必要はありません。
- ・ ヒノヒカリより収穫が遅い品種は、生育期間が長く、十分な生育量を確保できるため、増肥の必要はありません。

● 水管理でガス害を予防

- ・ 田植え後、除草剤散布までの間は浅水とします。
- ・ 除草剤散布後1週間は湛水し、7日以上経過してから強制落水し、ガス抜きします。落水後もガスが発生する場合は、間断かん水を行います。（3～4日おきに湛水と落水を繰り返す）

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！